

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 21 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370491

研究課題名(和文) 満洲語の意味と用法からアプローチする清代北京語の語彙・語法研究

研究課題名(英文) A study on lexicon and grammar of Beijing dialect in Qing dynasty by approach from meanings and usages of Manchu

研究代表者

竹越 孝 (Takekoshi, Takashi)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10295230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、清代に刊行された満洲語と中国語の対訳会話書類を対象として、満洲語の意味や用法から見た清代北京語の語彙・語法面における特徴を考察した。具体的には、『清文啓蒙・兼漢満洲套話』と『清文指要』に対する文献学的検討を基礎として、それぞれの翻字・翻訳テキストを作成するとともに、満洲語の格語尾や活用語尾と中国語がいかなる対応関係にあるかという角度から、清代北京語の語彙・語法における特徴について検討を行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the feature in the lexicon and the grammar of Beijing dialect in Qing dynasty by using Manchu-Chinese bilingual conversation books in Qing dynasty. After philological study of two Manchu-Chinese bilingual conversation books, Jianhan Manzhou Taohua in Qingwenqimeng, and Qingwenzhiyao, the author published transcription and translation of these texts, and suggested the feature in the lexicon and the grammar of Beijing dialect in Qing dynasty from the angle how case suffixes and functional suffixes of Manchu were translated to Chinese.

研究分野：言語学

キーワード：満洲語 北京語 清代 中国語

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 清代の満漢対訳会話書による北京語研究の意義

清代には、北京への遷都(1644年)以後、急速に漢化し母語である満洲語を忘れていった満洲人のために、夥しい数の中国語による満洲語学習書や中国語の満洲語訳文献が出版された。そのうち、中国語史の研究にとって有益な材料となり得るものに、満洲語と中国語の対訳形式による会話書がある。これらに見られる中国語は極めて口語性に富み、清代北京語研究にとっての第一級資料であることが知られている。

しかし、こうした会話書の類はかなり多数現存しているにも関わらず、満洲語の読解が壁となって、中国語学の立場からの研究は、二、三の先達を除けば、日本のみならず世界でも空白と言ってよい状態が続いていた。

(2) 『清文啓蒙・兼漢満洲套話』と『清文指要』の中国語史上における価値

本研究が主な対象としたのは、『清文啓蒙・兼漢満洲套話』(1730年)と『清文指要』(1789年)という二種の代表的な満漢対訳会話書である。これらは満漢対訳会話書類の中で特に広く流通していたと思われ、いくつかの先行研究によって、最も信頼に足る清代北京語語彙・語法研究の資料という位置付けを与えられている。

(3) 満洲語の意味と用法からアプローチすることの重要性

『清文啓蒙・兼漢満洲套話』にせよ『清文指要』にせよ、これまでの研究では、それぞれの文献内部における個別の文法現象が恣意的に取り上げられるのみで、しかもその分析は中国語からの視点に偏っている嫌いがあった。特に欠けていたのは、これらの文献の中国語が基本的に満洲語の翻訳として存在するものであるという認識である。したがって、これからの研究は満洲語の名詞格語尾や動詞活用語尾、あるいは各種の接尾辞や後置詞と中国語がいかなる対応関係にあるかを探る、即ち満洲語の意味と用法から中国語の語彙・語法にアプローチするという方向性を持たなければならない。

## 2. 研究の目的

(1) 異本及び関連資料の調査と文献学的検討

いくつかの先行研究によると、『清文啓蒙』は次の三系統に分かれる。

雍正(1723-1735)原刊本の系統

乾隆(1736-1795)改訂本の系統

「兼漢満洲套話」のみからなる系統

また、『清文指要』は次の二系統に分かれることが知られている。

1789年原刊本の系統

1818年改訂本の系統

以上の『清文啓蒙』及び『清文指要』の異

本や関連文献の調査は、まだほとんど実施されていないため、まずそれぞれのテキストについて、世界にどの程度異本が存在し、どの版本が最良であり、それぞれどのような継承関係にあるかという点に対する文献学的検討を行うことを目的とした。

(2) 翻字翻訳テキストの作成

本研究課題の申請に先立って、申請者は『清文啓蒙』の系統に属する『兼漢満洲套話清文啓蒙』(1761年刊)の翻字と翻訳を発表したが、これをの両系統と対照させつつ『兼漢満洲套話』の校本を作成することを目的とした。また、『清文指要』についても、の両系統を対照させつつ、同様の翻字翻訳テキストを作成し、研究の基盤となるデータを構築することを目的とした。

(3) 満洲語の意味と用法からのアプローチ

上で作成した『清文啓蒙・兼漢満洲套話』と『清文指要』の翻字翻訳テキストに基づいて、それぞれの文献における満洲語の名詞格語尾や動詞活用語尾、あるいは各種の接尾辞や後置詞と中国語がいかなる対応関係にあるかを探ることを目的とした。このことにより、清代北京語の語彙・語法面における特徴をより正確かつ網羅的に記述することが可能となる一方、これらの文献において満洲語の中国語に対する干渉が見られるか否かという問題と、それが満洲語の直訳によるものなのか、満洲族の話す中国語の反映なのかという問題についても考察することが可能になる。

## 3. 研究の方法

(1) 平成25年度

満漢対訳会話書に関する包括的記述

現存する満漢対訳会話書は10種以上に及ぶ。各種目録類の博搜と各図書館における実見調査によって、一次資料に関する記述の拡充に努める。

『清文啓蒙』及び『清文指要』の異本・関連資料に対する調査

『清文啓蒙』は少なくとも三系統に分かれ、また『清文指要』も少なくとも二系統に分かれる。これらのテキストについて可能な限り実見調査を行い、書誌的な記述を残すとともに、複写を収集し文献学的な検討に備える。

『清文啓蒙』及び『清文指要』に対する文献学的検討

上記の資料調査を基礎として、『清文啓蒙・兼漢満洲套話』及び『清文指要』の異本や関連資料が、相互にどのような関係を持ち、どのような継承関係を有しているかという文献学的な検討を行う。これにより、先行研究の記述が妥当なものであるかという点を検証するとともに、本研究に用いる上ではどのテキストが最良であり、どの点に留意しつつ研究を進めるべきかという問題を明らかにする。

## (2) 平成 26 年度

『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』翻字翻訳テキストの作成

本研究課題の申請に先立って作成した『兼漢滿洲語套話清文啓蒙』の翻字翻訳テキストを『清文啓蒙』における他系統の諸本と照らし合わせることによって、すべての異本の情報を取り込んだ『兼漢滿洲套話』の校本を作成する。

『清文指要』翻字翻訳テキストの作成

『清文指要』については、1789 年原刊本の系統に基づく翻字と現代中国語訳が発表されているが、本研究では 1818 年の改訂版である『新刊清文指要』の翻字翻訳テキストを作成する。

## (3) 平成 27 年度

上で作成した『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』と『清文指要』の翻字翻訳テキストに基づいて、それぞれの文献における滿洲語の名詞格語尾や動詞活用語尾、あるいは各種の接尾辞や後置詞と中国語がいかなる対応関係にあるかを探り、清代北京語の語彙・語法面における特徴をより正確かつ網羅的に記述する。また、これらのテキストに見られる滿洲語の中国語に対する干渉の有無と、その原因が直訳なのか口頭語の反映なのかという問題についても検討する。

## 4. 研究成果

本研究は、清代に刊行された滿洲語と中国語の対訳会話書類を対象として、滿洲語の意味や用法から見た清代北京語の語彙・語法面における特徴を考察しようとするものであった。具体的には、『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』と『清文指要』に対する文献学的検討を基礎として、それぞれの翻字翻訳テキストを作成するとともに、滿洲語の格語尾や活用語尾、あるいは各種の接尾辞や後置詞と中国語がいかなる対応関係にあるかという角度から、清代北京語の語彙・語法にアプローチすることを目的とした。その成果は以下の通りである。

### (1) 『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』についての研究

本研究課題の遂行に先立って、申請者は『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』の一テキストである『兼漢滿洲語套話清文啓蒙』について翻字と翻訳を公表したが、本研究においては、それを『清文啓蒙』の他系統のテキストと照らし合わせ、すべての異本を取り込んだ形で『兼漢滿洲套話』の校本と滿洲語・中国語索引を作成した。

### (2) 『清文指要』についての研究

『清文指要』については、1789 年原刊本の系統に基づく翻字と現代中国語訳が発表されているが、本研究においては、1818 年改訂

本の系統である『新刊清文指要』を対象として、翻字と翻訳及び中国語索引を作成した。

### (3) 文献学的検討及び言語学的検討

『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』及び『清文指要』のそれぞれについて、作者、成立年代、現存する諸版本の系統及びその継承関係等に対する検討を行った。また、それぞれのテキストに見られる滿洲語の語尾や接辞と中国語の虚詞を比較して、両者の間に明確な対応関係があることを示すとともに、これら文献における中国語は基本的に滿洲語の翻訳として存在していることを明らかにした。

### (4) 今後の展開

本研究課題を遂行する中で、『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』と『清文指要』以外の滿漢対訳会話書類についても文献学的検討を行い、翻字翻訳テキストを作成した上で、中国語学の立場からの分析に備える必要が痛感された。例えば次のような文献である。

『滿漢成語對待』(1702 年)

『清話問答四十條』(1758 年)

『滿漢合璧集要』(1766 年)

『庸言知旨』(1819 年)

『問答語』(1827 年)

これらを主な対象として、清代滿漢対訳会話書類に対する網羅的な研究を行うべく、「清代の滿漢対訳会話書類に関する総合的研究」と題する新たな研究課題を立ち上げることとなった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

竹越孝、滿洲語教材から北京語教材へ 清代滿漢対訳会話書の言語とその変容、中国言語文化学研究、査読無、第 5 号、2016 年、pp.37 - 50

竹越孝、試論清代滿漢合璧会話教材的漢語性質 以《滿漢字清文啓蒙・兼漢滿洲套話》為例(中国語)、遠藤光暁・石崎博志編、現代漢語的歴史研究、査読無、浙江大学出版社、2015 年、pp.20 - 29

竹越孝、這句台詞是誰說的? 近代以前東亞漢語会話教材的說話者標記(中国語)、神戸大論叢、査読無、第 65 卷第 2 号、2015 年、pp.93 - 106  
<https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/>

竹越孝、詞彙興替与制約(中国語)、神戸大論叢、査読無、第 64 卷第 4 号、2014 年、pp.7 - 19  
<https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/>

竹越孝、『兼漢滿洲套話』の諸版本について

て、水門、査読無、第25号、2013年、pp.94  
- 106

〔学会発表〕(計17件)

竹越孝、《満漢成語対待》 現存最早の清代満漢合璧会話教材 (中国語)、紀念蔣礼鴻先生誕辰100周年暨第9屆中古漢語國際學術研討会、2016年3月27日、杭州(中国)

竹越孝、從滿語教材到漢語教材 清代満漢合璧会話教材の語言及其演變 (中国語)、第7屆世界漢語教育史國際學術研討会、2015年11月6日、廈門(中国)

竹越孝、太田辰夫の近代漢語研究(中国語)、日本中国語学会第65回全国大会、2015年10月31日、東京大学(東京)

竹越孝、飲食動詞的歷史演變与地理分布(中国語)、中国語の文献言語学と方言地理学ワークショップ、2015年10月25日、神戸市外国語大学(神戸)

竹越孝、文法觀の誕生 清代の滿洲語文法書から、中日理論言語学研究会第43回研究会、2015年10月18日、同志社大学サテライトキャンパス(大阪)

竹越孝、清代の滿洲語文法書における文法記述 『清書指南』・『清文啓蒙』を中心に、國際訳学書学会第7回國際學術會議、2015年8月1日、ソウル(韓国)

竹越孝、滿洲語教材から北京語教材へ 清代満漢対訳会話書の言語とその変容、第9回國際シンポジウム「中国語教育と北京官話」、2015年7月19日、大東文化大学(東京)

竹越孝、清代満漢合璧文献対漢語史研究上の価値(中国語)、2014年12月25日、2014年12月29日、天津(中国)、北京(中国)

竹越孝、論《元朝秘史》兩種漢訳の時間前後問題(中国語)、元白話与西北漢語方言國際學術研討会、2014年8月16日、西寧(中国)

竹越孝、論“直訳”の實際意図 以蒙漢、満漢対訳文献為例(中国語)、元白話与近代漢語國際學術研討会、2014年7月24日、武漢(中国)

竹越孝、助詞“是呢”について、中国近世語学会2014年度研究總會、2014年6月7日、愛知大学(名古屋)

竹越孝、這個台詞是哪一方說的?—近代以前東亞漢語教材の說話者標記(中国語)、國際訳学書学会第6回國際學術會議、2014年3月15日、北京(中国)

竹越孝、中国語史研究におけるテキストの問題、日本中国語学会第2回次世代シンポジウム、2013年10月14日、秋田大学(秋田)

竹越孝、詞彙興替與制約(中国語)、中国語言文字学國際學術研討会、2013年10月6日、クアラルンプール(マレーシア)

竹越孝、制約対詞彙興替起到的作用 從“也”、“了”、“完”的演變談起(中国語)、第5屆韓漢語言学國際學術研討会、2013年8月30日、杭州(中国)

竹越孝、試論清代満漢資料の漢語性質(中国語)、現代中国語の歴史的研究ワークショップ、2013年7月6日、琉球大学(沖縄)

竹越孝、兼漢滿洲套話の諸版本について、滿族史研究会第28回大会、2013年5月25日、大阪經濟法科大学(大阪)

〔図書〕(計2件)

竹越孝、好文出版、満漢字清文啓蒙〔会話篇・文法篇〕 校本と索引、2016年、330頁

竹越孝、古代文字資料館、新刊清文指要 翻字と翻訳、2015年、322頁

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹越 孝 (TAKEKOSHI, Takashi)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 10295230

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし